

「パキスタンの地質と地下資源」の特集に当たって

白波瀬 輝夫¹⁾

パキスタンは日本からは遠い国である。しかし、地質学者にとって、パキスタンは格別な存在であり、今や、ヒマラヤ・カラコルム山地はプレートテクトニクスで言うところの大陸地殻の衝突帯の典型として脚光をあびている。特に、パキスタン北部のコヒスタン地域は、インド大陸とユーラシア大陸の間に出来た島弧の浅部から深部までの地殻が押し上げられて地表に露出している所として注目をあびている。

一方、パキスタンの天然資源に目を転ずると、天然ガスが豊富で100%自給、石油もかなりの産出があり国内需要の30%は自給可能で、今後も埋蔵量は増加する可能性が高い。石炭の埋蔵量は豊富であるが、良質炭に乏しい。金属鉱物資源は、クロム鉱石の原鉱が少量であるが輸出されるほかは、開発途上と言ってよい。イラン国境に近いチャガイ地域でポーフィリー・カッパー型の金を伴う銅鉱床や、カラチ北方のいわゆるミシシッピーバレー型の鉛・亜鉛鉱床がそれである。これに比べて工業原料鉱物資源ははるかに豊富で、大手のセメント産業や石材産業が育っている。また、ソルト・レンジで、カンブリア系の巨大な岩塩ドームを100年来開発して、食塩とソーダ肥料を生産しているが、あまり知られていない。

資源開発に対する日本の協力はあまり多くなく、JICAの派遣専門家による工業原料鉱物資源や地熱資源の調査が行われたほか、資源開発基礎調査が鉛・亜鉛鉱床をもつクズダール地域で行われたのみであった。工業技術院が行う途上国との研究協力事業として1987年から始められた「パキスタン、コリジョン帯の地質・鉱物資源の研究」の協力相手であるパキスタン地質調査所は、この事業を通じて我が国の地質調査所に対して、日本政府に要請している無償資金協力およびプロジェクト方式技術協力で“地質科学研究所を建設し、鉱物資源



写真 1994年秋、イスラマバードを訪問された橋本通産大臣(当時)と坂本審議官(右端)に研究所を案内する筆者(中央右)と平山専門家(中央左)。

探査能力を高めるべく、人材を養成する技術協力プロジェクト”の中心となって欲しい旨強く要請してきた。

その後のプロジェクト発足以後の経緯は、本文に紹介されているが、1990年から1997年3月まで実施されたこのプロジェクトは、トルコのMTA(鉱物資源調査総局)に対する20年以上にわたる息の長い協力とは違った形で、地質調査所が力を入れて取り組んだ技術協力であった。

プロジェクト終了後JICAの担当部や通産省から当プロジェクトに対して、高い評価を頂いたわけであるが、本当の評価はパキスタンにおいて地質科学研究所自体が今後どの様に発展して行くかによって占われるべきであろう。

このプロジェクトの経験をまとめておくことは、今後の技術協力の計画にとって無駄ではないと思うし、パキスタンの地質に接する機会を得られた専門家の皆さんに共同研究の成果を紹介して頂くことでパキスタンの魅力を感じて頂ければと思い、この特集号を企画した。

1) 元地質調査所 国際協力室